

# 「経済を通して社会がわかる」中学校社会科の授業構成

—岩井克人氏の経済認識を中心として—

A Junior High School Social Studies Lesson Plan "Understanding Society Through Economics",  
Based on Economic Theories of Katuhito Iwai

岩野清美  
(中間市立中間東中学校)

## I 研究の目的と方法

生徒に社会認識を獲得<sup>1)</sup>させるという社会科の目的を達成しうる、経済教育の授業モデル開発が本研究の目的である。

経済教育の目標は、子どもに経済学の成果を理解させることではない。経済学の視点<sup>2)</sup>と理論<sup>3)</sup>を用いて社会変動<sup>4)</sup>を明らかにすることである。具体的には経済学の視点として「お金の流れ」<sup>5)</sup>、理論として「競争と相互依存」<sup>6)</sup>を設定した。

原田智仁氏は理論について、「諸事象の関連を説明する仮説」であり、概念が「説明のしかた」あるいは「様々なことがらの関連」であるならば、「それは理論と言い替えてもよい」<sup>7)</sup>と述べている。このように理論をとらえることにより、「事象に対して投げかける質問を引き出し」<sup>8)</sup>、「『発見促進能力』を有する」<sup>9)</sup>という、理論の特徴を生かした授業設計が可能になる。

「経済」という語は、一般的に次の2つの意味に解される。

- ① 人間は、最小の費用で、最大の効果を得ようとする（経済の事象的側面）。
- ② 人間は、環境との交換関係の中で、生存している（経済の事象的側面）。

経済的事象の追究の場面で生徒たちは、究極的には上記①か②の命題を追究する。すなわち、①の追究により獲得される知識は、「〇〇さんは、最大の効果を得るために、…する」であり、②の追究により獲得される知識は、「〇〇さんは、周りの自然環境や社会的環境の中で生存しているので、…する」である。前者は、目的—結果の知識であり、後者は原因—結果の知識である。

社会認識教科としての社会科で獲得させるべき

知識は、原因—結果の知識である<sup>10)</sup>。したがって、社会科の授業で追究すべき「経済」とは、経済の事象的側面である。

また、「社会がわかる」とは「自分たちが現実に生活している社会を見つめ直し、構造として再構成することである」と定義する。

つまり、「経済を通して社会がわかる」経済教育では、経済学の視点と理論を用いて社会事象を分析し、その結果得られた知識を関係づけ、構造化を行う。

本研究の方法は以下の通りである。

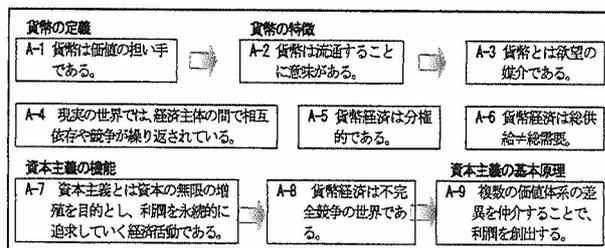
- (1) 科学的経済認識のモデルと、「経済を通して社会がわかる」授業で獲得される知識の構造図を明示する。
- (2) (1)の成果をもとに、授業モデルを提案する。

## II 科学的経済認識のモデル

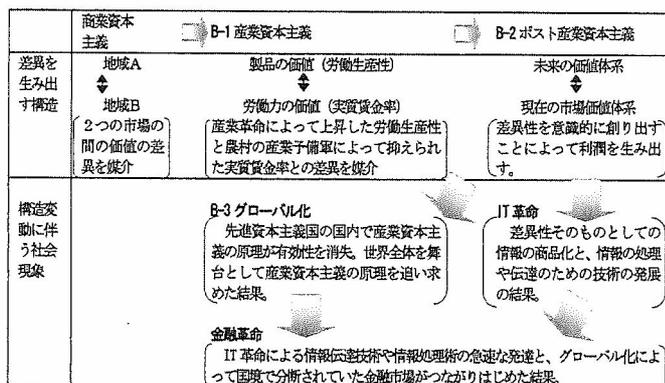
### 1 岩井克人氏の経済認識

岩井克人氏は、「複数の価値体系の差異を媒介することで、利潤を創出することが資本主義の基本原理である」という経済学の命題を議論の出発点として、社会変動を経済体制の変化から説明する。このように社会変動を経済学の視点から一つの流れとして説明したところに、岩井氏の功績がある。本研究では、この岩井氏の経済認識を科学的経済認識のモデルとして取り上げる。

「お金の流れ」を分析視点として岩井氏の著作<sup>11)</sup>から経済学の命題を抽出し、その関連を整理、構造化を行った。「貨幣に関する認識」、「資本主義に関する認識」、「社会変動に関する認識」の3つが抽出、構造化された（のちの授業モデル開発に関わる部分のみを次ページ（図I）に示す）。



(図 I-1) 岩井克人氏の貨幣と資本主義に関する認識



(図 I-2) 岩井克人氏による社会変動

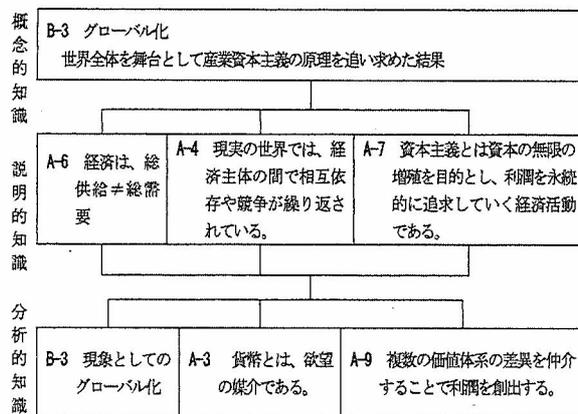
岩井氏は、資本主義の基本原則を追求することによって生じる現代の社会変動として、グローバル化、IT革命、金融革命の3つを挙げている。

## 2 「経済を通して社会がわかる」授業の知識の構造

岩井氏の経済認識のモデルをもとに、59の先行授業実践を分析した。それらのうち、貨幣・資本主義、社会変動に関する知識を生徒に獲得させているものは37実践あった。これらの実践で獲得された知識のなかから、産業資本主義、ポスト産業資本主義、グローバル化に関する概念的・説明的知識とそれを補完しうる分析的・記述的知識<sup>12)</sup>を抽出・構造化した。また、これらの知識が岩井氏の経済認識のモデルではどの部分にあてはまるのかを示した。紙面の都合上、授業モデル開発に関わるグローバル化の部分のみを(図II)に示す。

### III 開発した授業モデル

- 1 単元名 「私たちの生活とグローバル化」
- 2 目的 今日のグローバル化が資本主義経済の進展によるものであることを、農業をモデルとして探究する。



(各命題の前に記された記号は、岩井克人氏の経済認識のモデル(図I参照)に対応する)  
(図II)「経済を通して社会がわかる」授業の知識の構造図

### 3 対象 中学校社会科公民的分野

#### 4 題材について

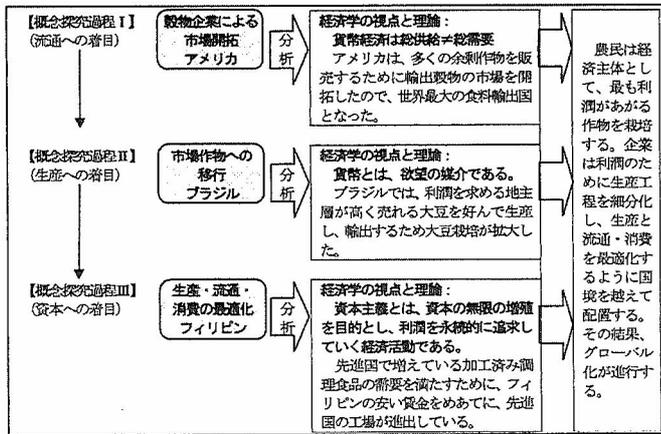
中学校社会科公民的分野の開発単元「私たちの生活とグローバル化」の授業モデルを提案した。グローバル化は、岩井克人氏のおけるグローバル化、IT革命、金融革命という3つの社会変動のうち、すべての中学校社会科公民的分野の教科書で取り上げられている内容である。従って、現場で実践しやすい題材である。

このようにグローバル化を授業モデルの題材に選定することは、教育内容としての科学性、授業モデルの実践可能性、生徒の生活との結びつきの面からみて意義深い。

#### 5 単元の内容構成

授業モデル開発にあたって、基本的学習過程の設計と知識の分類や問いと習得される知識の関係については、岩田一彦氏<sup>13)</sup>の考えをもとにする。

本研究で開発した授業モデルでは、授業過程は概念探究過程として構成され、生徒は単元目標である概念的知識を、単元の終結段階で獲得する。しかし概念を獲得するだけでは一般化された、転移可能な知識にならない<sup>14)</sup>。たとえば西林克彦氏は、知識を「法則的知識(L)」、「接続用知識(I)」、「個別的事実(E)」に分類した上で、個別的事実(E)を理解したり、法則的知識を使ったためには、接続用知識(I)が重要であると主張している<sup>15)</sup>。本研究では、経済学の命題を西林氏のいう「接続用知識」とみなし、概念的・説明的知識と分析的・記述的知識の中間に位置づ



(図Ⅲ) 単元構成

ける。

単元を貫く問いと、単元の内容構成は以下の通りである。

○ 単元を貫く問い

なぜ、グローバル化は進行しているのだろうか。

○ 単元構成

単元構成を、(図Ⅲ)に示す。

6 学習過程 紙面の都合上、【概念探究過程Ⅲ】の学習過程のみ、以下に示す<sup>16)</sup>。

### 【概念探究過程Ⅲ】

#### 目 標

○ フィリピンに先進国向けの製品を製造する工場が進出する理由を、都市に流れた人々が最低の賃金で働くという工場労働者の側の要因と、加工済み調理食品の需要が増え、生産と流通を国境を越えて配分するという先進国の工場経営者側の要因から説明できる。

#### 展 開

段階	主な発問・指示	予想される発言・思考	経済学の視点と理論、 経済学の命題	指導上の留意点	資料
情報の 収集	<p>○ この資料を見て、気がついたことをノートに書きなさい。</p> <p>このように貿易が大きく伸び、世界経済の統合化が進む現象をなんといいましたか。</p> <p>○ これまでグローバル化のことを学んできて、何か気づくこと、疑問に思うことはありませんか。</p> <p>○ 穀物以外に、私たちが輸入している食糧にはどのようなものがあるだろう。</p>	<p>○ 世界的な貿易額は年々増えている。</p> <p>・ 海外から多様な商品を輸入することで、私たちの生活は豊かになっている。</p> <p>・ グローバル化</p> <p>○ 穀物以外に、私たちが輸入している食糧にはどのようなものがあるだろう。</p> <p>○ 私たちが食べている食糧は、どのような人々によって作られているのだろう。</p> <p>・ 私たちが食糧を輸入することは、外国の人たちにどのような影響を与えているのだろう。</p> <p>○ スーパーマーケットで売られている缶詰や乾燥食品、冷凍食品、生鮮食品だけでなく、外食産業の調理工程の大半を海外に移転している。</p>	<p>接続用知識 経済学の視点と理論：お金の流れ 現象としての グローバル化</p>	<p>・ 日本の貿易と私たちの生活の関わりについて、資料をもとに具体的に考えさせる。</p> <p>○ 日本が国土面積（世界の0.3%）、人口（2%）であるのに輸入は世界の貿易額の5.2%を占めている（2003年）ことを指摘し、私たちの生活は多くの輸入品によって支えられていることに気づかせる。</p> <p>・ 今まで学習した内容をもとに、新たな問いを発見させるようにする。</p> <p>・ 私たちの身のまわりにある冷凍加工食品を例に、原料だけでなく加工済み食品の多くも輸入していること、日本の食料輸入相手国は世界各地に広がっていることに気づかせる。</p>	【1】世界の貿易額推移

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 私たちが食べている食糧は、どのような人々によって作られているのだろう。</li> <li>○ 私たちが食料を輸入することは、フィリピンの人々にどのような影響を与えているのだろう。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時の学習内容をもとに予想しよう。</li> <li>・ 予想を検証しよう</li> </ul> </li> <li>○ フィリピンには、どのような工場が進出しているのだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フィリピンからは、パイナップルやバナナが輸入されている。</li> <li>○ アグリビジネス企業が大農園を作り、できた作物を輸出している。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農民（地主層）が高く売れる輸用作物を栽培している。</li> </ul> </li> <li>○ 土地を失った農民が都市に流入して、非農業人口が増える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 輸入食料に依存するようになる。</li> </ul> </li> </ul> <p>〔個人で、前時までの学習内容をもとに予想をたてる。〕</p> <p>〔個人で、必要な資料を選択して、仮説を検証する。個人が立てた仮説と検証の結果を、グループで交流する。〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ フィリピンでは、輸出用のパイナップルとバナナの生産が増加している。</li> <li>・ フィリピンでは、農業人口が減少し、農民の都市への流出が起きている。</li> <li>・ フィリピンでは、輸入小麦への依存を高めている。</li> <li>・ フィリピンの農民は民衆に必要なものよりも、高く売れる輸出用の穀物を作ろうとする。</li> <li>・ 先進国が、加工済み調理食品の工場を建設している。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ フィリピンから輸入されている食品を例に、学習の焦点をフィリピンに絞る。</li> <li>○ フィリピンのバナナ農園の写真から、フィリピンのバナナが自給用ではなく、輸出用に大量に作られていることに気づかせる。</li> <li>○ プランテーションについて簡単に復習する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前時の学習内容で、私たちがブラジルの大豆を輸入することが、ブラジルの人々にどのような影響を与えていたかを想起させる。</li> </ul> </li> </ul> <p>【2】フィリピンのバナナ農園の写真</p> <p>【3】フィリピンのバナナ生産量と輸出量</p> <p>【4】フィリピンのパイナップル生産量と輸出量</p> <p>【5】フィリピンの農業人口・非農業人口推移</p> <p>【6】フィリピンの小麦輸入</p> <p>【7】フィリピンのバナナ栽培</p> <p>【8】フィリピンの外国企業</p>	
学習問題の発見・把握	先進国の工場経営者はなぜ、先進国向けの加工済み調理食品の製品を製造する工場をフィリピンに造るのだろうか。				
予想の提示 仮説の設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 理由を予想し、仮説を立てよう。</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 先進国の工場経営者が先進国向けの加工済み調理食品を製造する工場をフィリピンに造るのは、都市に流れた農民が安い賃金で働くからである。</li> <li>② 先進国の工場経営者が先進国向けの加工済み料理食品を製造する工場をフィリピンに造るのは、先進国で増えている加工済み調理食品の需要に対応するために、少しでも安い値段で造れるよう、生産と流通を、国境を越えて配分するからである。</li> </ol>		<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 加工済み調理食品製造工場の進出という「結果」を生み出す「原因」を考えさせる。</li> <li>○ 「先進国の工場経営者が先進国向けの加工済み料理食品を製造する工場をフィリピンに造るのは、～だからである」という形で各自にまとめさせる。</li> </ul>	

<p>仮説の根拠となる資料の収集</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>この仮説を確かめるには、どのようなことを調べなくてはならないでしょう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィリピンの加工済み調理食品工場で働く人の賃金や労働条件について調べる。</li> <li>先進国での加工済み調理食品の需要について調べる。</li> <li>加工済み調理食品が私たちの手元に届くまでの、生産と流通の経路について調べる。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒から出た仮説を、①工場で働く労働者に関するものと、②工場経営者に関するものに板書してまとめる。</li> </ul>	
<p>先進国向けの製品を製造する工場は、なぜフィリピンに進出するのだろうか。工場で働く人たちの要因から考えよう。</p>					
<p>検証①</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料を読んで、仮説を検証しよう。</li> <li>フィリピンで都市に流れた人々は、生きていくためにどうするだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>都市に流れた人々は、生きていくために、最低の賃金で働く。</li> </ul>			<p>【9】フィリピンの工場働く人々</p>
<p>フィリピンに、先進国向けの製品を製造する工場が進出するのは、輸出用の作物栽培のために土地を失った人々が都市に流れ、生きていくために最低の賃金で働き、賃金が安いからである。</p>					
<p>検証①のまとめ 新たな問いの発見</p>	<p>先進国の工場経営者はなぜ、先進国向けの加工済み調理食品を製造する工場をフィリピンに造るのだろうか。先進国の様子から考えよう。</p>				
<p>資本主義とは、何を目的とした経済活動だろうか。</p> <p>もうけるためである。</p> <p>資本主義とは、資本の無限の増殖を目的とし、利潤を永続的に追求していく経済活動である。</p>					
<p>仮説の根拠となる資料の収集②</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>この仮説を確かめるためには、どのようなことを調べなくてはならないでしょう。</li> <li>資料を読もう。</li> <li>仮説を確かめよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先進国では、加工済み調理食品の需要が増えている。</li> <li>生産と流通の費用が、最も安いところで生産するようになっている。</li> <li>先進国の加工済み調理食品の需要</li> <li>生産と流通の配分</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>今まで学習した内容をもとに、追究の視点を考えさせるようにする。</li> </ul>	
<p>検証②</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先進国では、加工済み調理食品の需要が増えている。</li> <li>利潤を求める企業は、生産と流通を国境を越えて配分する。</li> <li>先進国では、生産工程は細分化されている。</li> </ul>				
<p>【10】先進国の加工済み調理食品の需要 【11】多国籍企業</p>					

<p>概念探究過程Ⅲのまとめ</p>	<p>◎ これまでの学習を振り返って、先進国の工場経営者はなぜ、先進国向けの加工済み調理食品を製造する工場をフィリピンに造るのかをまとめよう。</p>				
<p><b>【説明的知識Ⅲの獲得】</b>          フィリピンでは、都市に流れた人々は生きていくために最低の賃金で働く。一方、先進国では加工済み調理食品の需要が増えている。そのため、フィリピンの安い賃金をめあてに、先進国に調理済み食品を輸出するための工場が進出している。</p>					
<p>概念探究過程Ⅰ～Ⅲのまとめ</p>	<p><b>【単元を貫く問い】</b>          なぜ、グローバル化は進行しているのだろうか。これまでの学習を振り返ってまとめよう。</p>				
<p><b>【概念的知識の獲得】</b>          農民は経済主体として、最も利潤があがる作物を栽培する。企業は利潤のために生産工程を細分化し、生産と流通・消費を最適化するように国境を越えて配置する。その結果、グローバル化が進行する。</p>					

○ 授業モデルの資料

- 【1】経済産業省パンフレット『世界と貿易だ！』
- 【2】鶴見良行『バナナと日本人』岩波書店，1982，p.184
- 【3】～【6】FAO資料より作成
- 【7】以下の著作より筆者作成。NHK取材班『21世紀は警告する②』日本放送出版協会，1989。大塚茂・松原豊彦編『現代の食とアグリビジネス』有斐閣，2004。加納弘勝『第三世界の比較社会論』有信堂，1996。スーザン・ジョージ『なぜ世界の半分が飢えるのか』朝日新聞社，1984。中西徹『スラムの経済学』東京大学出版会，1991。R. バーバック，P.フリン『アグリビジネス』大月書店，1987。渡辺利夫『開発経済学－経済学と現代アジア』日本評論社，1986。
- 【8】以下の著作より筆者作成。関下稔『日米貿易摩擦と食糧問題』同文館出版，1987。S.ジョージ，前掲書，1984。R.バーバック他，前掲書，1987。
- 【9】R.バーバック他，前掲書，1987より著者作成。
- 【10】以下の著作より筆者作成。マーク・ドラベンストット「序論」I.P.シュルツ，I.M.ダフト編 小西孝蔵・中嶋康博監訳『アメリカのフードシステム 食品産業・農業の静かな革命』日本経済評論社，1996。テニス・R，ヘンダーソン，チャールズ・R.ハンディ「食品流通システムの国際的側面」I.P.シュルツ他編，前掲書。松原豊彦「世界の食料事情と多国籍アグリビジネスによる食糧支配」大塚茂・松原豊彦編『現代の食とアグリビジネス』有斐閣，2004。ダン・モーガン 喜多迅鷹・喜多元子訳『巨大穀物商社』日本放送出版協会，1980。
- 【11】以下の著作より筆者作成。NHK取材班，前掲書，1989。アイリス・タスクマン 櫻井よしこ日本語版総監修，久保田陽子訳『グローバルゼーション IN THE NEWS 現代の世界と日本を知らう5』小峰書店，2004。M・ドラベンストット，前掲，1996。松原豊彦，前掲，2004。

7 授業モデルの成果

次の2つの視点にもとづいて、授業モデルの成果を示す。

① 岩井克人氏の経済認識のモデルが、どの程度具体的に授業モデルに組み込まれているか。

開発した授業モデルは、(資料Ⅱ)に示した中学校社会科の「経済を通して社会がわかる」授業の知識の構造図のうち、グローバル化に関する説明的知識をすべて含んでいる。したがって、岩井

克人氏の経済認識のモデルが組み込まれている、換言すれば「経済を通して社会がわかる」授業になっているといえる。

② 従来の「グローバル化」の学習と比較して、今回作成したモデルはどういう点で有効性が高いか。

次の2つの点について、開発した授業モデルの有効性が示される。

- ・ 開発した授業モデルでは、多国籍企業の活動

だけでなく経済主体としての農民にも焦点を当てている。農民も経済主体として利潤を得ようとするがゆえにグローバル化に巻き込まれる要因があり、グローバル化が資本主義経済の必然であることが示されている。

- グローバル化が、人々の生活や地域形成に大きな影響を及ぼしていることが、ブラジルやフィリピンを事例に具体的に示されている。

これらの点から、開発した授業モデルは、「経済を通して社会がわかる」ために有効なモデルであるといえる。

#### IV 本研究の成果と課題

本研究では、新しい経済教育の内容論と探究の論理を提起した。経済教育の内容を社会構造とし、社会構造を探究するための経済学の視点と理論を明示した。

本研究で提示した授業モデルは、中学校社会科で獲得される科学的経済認識のモデルに基づいたものであり、経済教育を現実に変えうる、実践可能なモデルである。反面、グローバル化を加速する情報や技術革新のはたらきに言及した授業開発については今後の課題とする。

#### 【註】

- 1) 「社会認識を獲得する」とは、社会を客観化し、構造として再構成することである。生徒たちは現実の世界のなかに生活しており、日々生徒なりの社会認識を獲得している。これら既存の社会認識を批判的に吟味・再構成し、科学的なものにしていく過程が社会科の授業過程である。
- 2) 私たちが物事を認識する際には、一定の視点が必要である。中久保邦夫氏は「一定の視点を持つことで（中略：引用者）構造や秩序、意味が見えてくる」（中久保邦夫「科学方法論における展開」角村正博編『経済学の方法論と基礎概念』日本経済評論社、1990、p.7）と述べている。一定の視点から社会事象を分析することは、子どもの社会認識の形成を図る上でも必要である（岩田一彦「社会事象の比較と社会認識の育成」『教育科学社会科教育』No.234、明治図書、1982年9月号、p.116）。つまり、視点を設定するこ

とは教材選択の論理であると同時に、生徒が授業において社会事象を探究する際にも欠かせない。また、見るということは、「対象の見えやその変化のあり方のなかに自分の視点の位置やその動き方の情報が含まれており、それを知覚するということ」（宮崎清孝・上野直樹『認知科学選書1 視点』東京大学出版会、1985、pp.81-82）である。このことは、「社会を認識している自己の位置を相対化」し、「認識内容の科学化を図る」（岩田一彦『社会科固有の授業理論・30の提言』明治図書、2001、p.84）上でも重要である。

- 3) 「概念」ではなく「理論」の語を用いるのは、概念的知識（本稿「開発した授業モデル」参照）との混同を避けるためである。

- 4) 草原和博氏は、科学的な社会認識を形成する総合社会科学研究の内容のまとめとして「地域の社会構造・変動を解釈させる『総合的社会科学研究』」を挙げている（草原和博『地理教育内容編成論研究—社会科地理の成立根拠』風間書房、2004、pp.407-408）。また、原田智仁氏は人間行為の意味を規定する「時代（社会）の構造や特質」に社会認識教育の内容の中核をおいている（原田、前掲書、p.124）。このように、「社会がわかる」とは社会を客観化し構造として再構成することであるが、現在進行中の現代の構造をつかむことは容易ではない。富永健一氏は、社会構造が変動するとき、すなわち社会変動の中でこそ、社会構造が明らかになると述べている（富永健一『社会学講義』中央公論社、1995）。これらのことから、社会変動は「社会がわかる」社会科授業の内容として成立しうる。

- 5) お金は、社会を流れ動いて社会に活力を与える血液に例えられる（全国銀行協会 HP (<http://www.morebank.gr.jp>)）。同時に、経済学とは、お金の流れを通して、人と人、人と社会、社会と社会の関係を見る学問である。また現代社会は、お金の流れが世界経済のリーディング・ファクターとなっている。P. F. ドラッカーは、世界経済の構造の基本的変化として、次の3つを挙げている。(1)一次産品経済が工業経済から分離した、(2)工業経済において生産が雇用から分離した、(3)財・サービスの貿易よりも資本移動が世界経済を動かす原動力となった。(P. F. ドラッカー 上田惇生他訳『マネジメント・フロンティア』ダイヤモンド社、1986、p.27)。このように「お金の

流れ」は、社会認識の枠組みとして有効である。

- 6) 人は、お金の流れを基盤にした資本主義経済のなかで、利潤を求めて行動する。資本主義経済の特徴は、分権的ということである。だれしものが他の人が生産する財やサービスと自分が生産する財やサービスを交換しながら生活している。また、利潤を最大化するために、自分の生産する財やサービスと競合する財やサービスを生産している人と、競争しながら生活している。社会は、人間同士の競争や相互依存としても記述できる。このように「競争と相互依存」は、市場環境とその中での経済主体の行動を分析する経済学の概念である。同時に、初期社会科から受けつがれている、人と他の人との関係、人間と自然環境との関係、個人と社会制度や施設との関係を理解する上での、社会科内容編成の重要な論理の1つである。
- 7) 原田智仁『世界史教育内容開発研究－理論批判学習－』風間書房、2000、p.98
- 8) 棚橋健治「社会科カリキュラム開発における“構造”概念について」日本社会科教育研究会『社会科研究』第31号、1983、p.60
- 9) ラカトシュ、村上陽一郎他訳『方法の擁護』新曜社、1985
- 10) 高根正昭氏は、「社会科学における問題解決のための論理」は、「問題を『結果』としてとらえ、その『結果』を生み出す『原因』となるべき要素を探り出す」ことであると述べている。(高根正昭『創造の方法学』講談社、1979、p.35)
- 11) 分析対象とした岩井克人氏の著作(年代順)
- ① 岩井克人『ヴェニス商人の資本論』筑摩書房、1985
  - ② 岩井克人『不均衡動学の理論』岩波書店、1987
  - ③ 柄谷行人・岩井克人『終りなき世界』太田出版、1990
  - ④ 岩井克人『貨幣論』筑摩書房、1993
  - ⑤ 岩井克人『資本主義を語る』講談社、1994
  - ⑥ 岩井克人・伊藤元重「経済理論の新展開」岩井克人・伊藤元重編『現代の経済理論』東京大学出版会、1994
  - ⑦ 岩井克人「経済成長論」岩井克人・伊藤元重編、前掲書、1994
  - ⑧ 岩井克人「資本主義にとっての二十世紀」吉川弘之編集代表『東京大学公開講座 文化としての20世紀』東京大学出版会、1997
  - ⑨ 岩井克人『二十一世紀の資本主義論』筑摩書房、2000
  - ⑩ 岩井克人『会社はこれからどうなるのか』平凡社、2003
  - ⑪ 岩井克人「社会の行方」糸井重里編著『智慧の実を食べよう 学問は驚きだ。』ぴあ株式会社、2004
- 12) 知識の分類・構造化論に関しては岩田一彦氏の議論に完全に依拠している。詳細は註13参照。
- 13) 岩田一彦『社会科固有の授業理論 30の提言』明治図書、2001、『地理教科書を活用したわかる授業の創造』明治図書、1984、参照。
- 14) たとえば、米国学術研究推進会議編著 森敏昭・秋田喜代美監訳『授業を変える 認知心理学のさらなる挑戦』北大路書房、2002。三宅なほみ・白水始氏は学習が転移する条件として、多様な視点とメタ認知を挙げている(三宅なほみ・白水始『学習科学とテクノロジー』放送大学教育振興会、2003)。
- 15) 西林克彦『間違いだらけの学習論 -なぜ勉強が身につかないか-』新曜社、1994
- 16) 【概念探究過程Ⅰ・Ⅱ】については、拙稿「『経済を通して社会がわかる』中学校社会科の授業構成－岩井克人氏の経済認識を中心として－」平成17年度社会系教科教育学会研究発表資料を参照されたい。